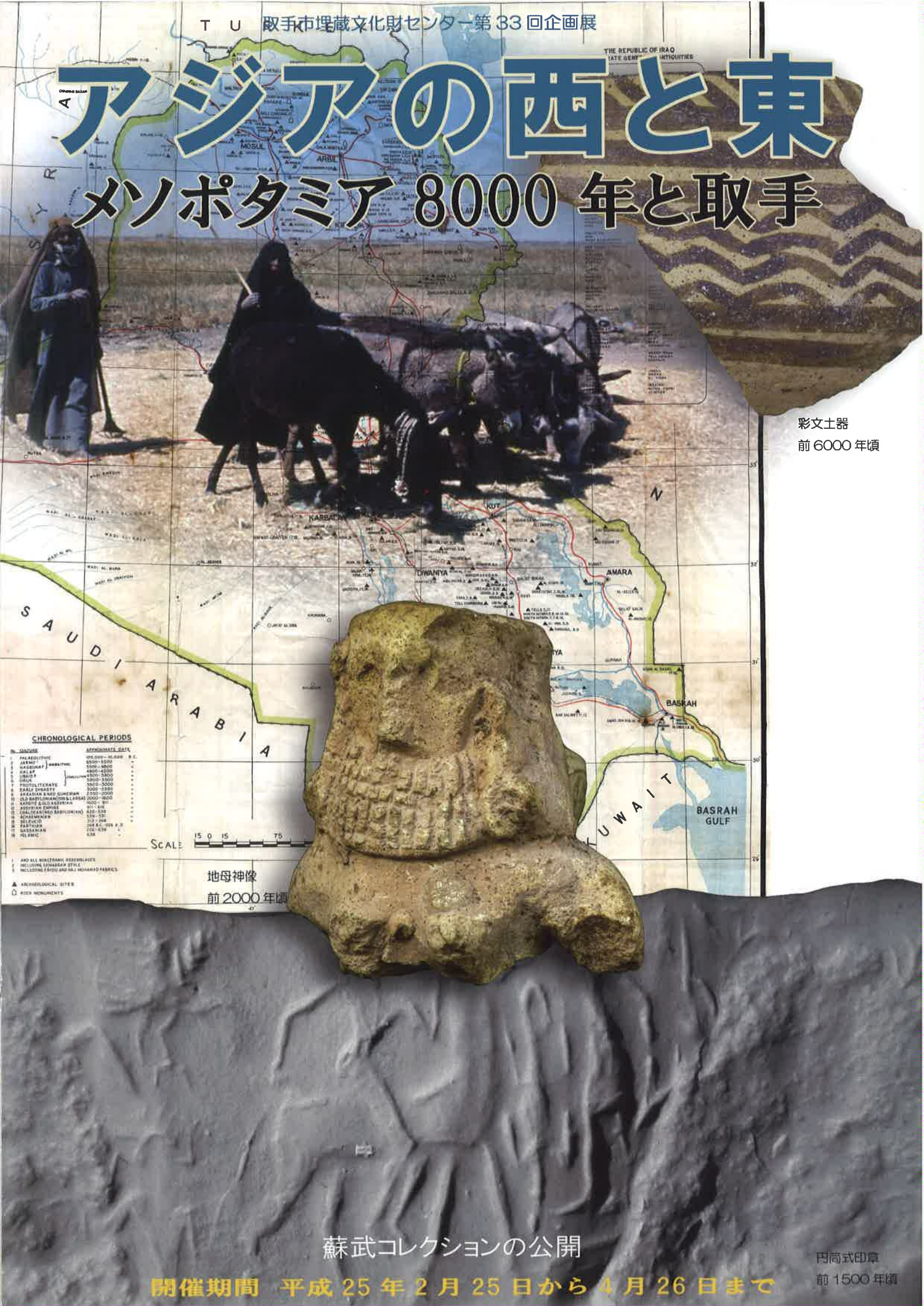


# アジアの西と東

## メソポタミア 8000年と取手



彩文土器  
前6000年頃

地母神像  
前2000年頃

蘇武コレクションの公開

開催期間 平成25年2月25日から4月26日まで

円筒式印章  
前1500年頃

### CHRONOLOGICAL PERIODS

PERIOD	APPROXIMATE DATE
1. PALAEOLITHIC	400,000 - 10,000 B.C.
2. NEOLITHIC	8000 - 3500
3. BRONZE AGE	3500 - 1200
4. IRON AGE	1200 - 500
5. CLASSICAL PERIOD	500 - 330
6. HELLENISTIC PERIOD	330 - 30
7. ROMAN PERIOD	30 - 638
8. ISLAMIC PERIOD	638 - 1918
9. MODERN PERIOD	1918 - present

- ▲ AND ALL MUSEUMS ASSEMBLAGES INCLUDING ISLAMIC STYLE
- INCLUDING ISLAMIC AND SAUDI ARABIAN PERIODS
- ▲ ARCHAEOLOGICAL SITES
- ROCK MONUMENTS

SCALE 15 0 15 75

## 第33回企画展「アジアの西と東 —メソポタミア 8000年と取手—」

1960年代イラクに赴任されていた蘇武演（そぶひろし）氏から、200点余りの考古資料が「市民の学習に役立てて欲しい」と取手市埋蔵文化財センターに寄贈されました。これらの資料は蘇武氏が、イラクで採集したもので、細石刃核、彩文土器、メソポタミア印章、楔形文字粘土板、イスラム陶器など多岐にわたっており、西アジアの歴史を身近に知ることのできる資料でした。今回これらの寄贈資料をもとに、世界の4大文明のひとつとされる古代メソポタミア文明とその後につづく、西アジアの歴史を紹介し、また取手市内遺跡出土の遺跡・遺物とメソポタミアの考古学資料を比較して、世界史からみた取手という地域に根ざした文明についてあらためて考えてみたいと思います。

今回の企画展の開催にあたって貴重な資料をご寄贈いただいた蘇武演氏にあらためてお礼を申し上げます。

平成25年2月

取手市埋蔵文化財センター



テルと呼ばれる遺丘である。手前で放牧の現地民と話をしているのが江上波夫博士。発掘中のテルの頂上にヤグラが建ち調査員がみえる。（写真 千代延氏提供）

### 講演会「現代文明の基層としての古代西アジア文明」

講師 筑波大学教授 常木 晃 博士

テル・サラサート5号丘の円形建物発掘風景（写真 千代延氏提供）

日時：3月30日土曜日 午後1時30分から午後3時

会場：取手市埋蔵文化財センター（当日受付）

講座「粘土に書かれた歴史」埋蔵文化財センター職員

日時：3月2日土曜日 午後1時30分から午後3時

会場：取手市埋蔵文化財センター（当日受付）

展示案内 埋蔵文化財センター職員

日時：毎週土曜・日曜 午前11時と午後2時から

会場：取手市埋蔵文化財センター

### 謝辞

企画展の全般について筑波大学 常木 晃 先生にご指導いただいた。

粘土板文書資料について筑波大学 柴田大輔 先生にご教示いただいた。

展示について長谷川敦章氏（日本学術振興会）にご指導いただいた。

イスラム陶器・ガラス器の分析について東京学芸大学 二宮修治 先生にご指導いただいた。

イスラム陶器・ガラス器について 村上 夏希氏（東京学芸大学）に分析していただいた。

イスラム陶器について中近東文化センター 岡野智彦 先生にご教示いただいた。

千代延恵正氏に東京大学イラク・イラン遺跡調査団の写真その他の図版をご提供いただいた。

松戸市立博物館には参考図書をご恵贈いただいた。

参考文献 「オリエント7千年展」1967 東京大学イラク・イラン遺跡調査団、「MESOPOTAMIA」1967 江上波夫ほか、「粘土に書かれた歴史」1958 キエフ（板倉勝正訳）、「古代オリエントの世界」2009 古代オリエント博物館、「メソポタミア文明の光芒」2011 平山郁夫シルクロード美術館・古代オリエント博物館、「図説メソポタミア文明」2011 前川和也、「古代ペルシャ展」1997 古代オリエント博物館、「ペルシャ文明の囀」2005 松戸市立博物館

# I. 先史時代（～前 3200 年）

人類は百万年前に登場し、地球上の各地へ広がり、約 3 万年前には、アジア東端の日本島に到達していた。

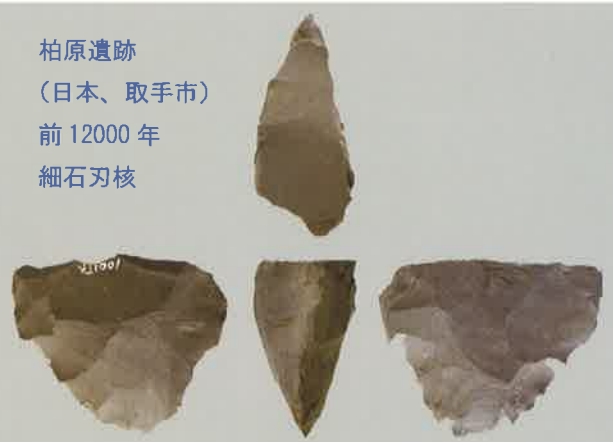
約 12000 年前、氷河期が終わると、世界中で作物の栽培や家畜の飼育など安定した農作物生産に成功し、文明の誕生につながっていった。メソポタミアは、西アジア地域の文明の中心地であった。

地理的に、ほぼ現在のイラクにあたり、平行して流れるチグリス・ユーフラテス川に挟まれた、いわゆる「肥沃な三日月地帯」と呼ばれた地域である。ここでは、水源近くで自生していた野生の大麥を栽培した原始農耕が早くから始まり、前 6000 年ころには灌漑農耕が発達して初期農耕文明が起こった。さらに村落的な定住から、前 3300 年ころには、宗教によって組織化された社会を基盤とする都市へ発展し、前 2900 年には、初期王朝時代が始まった。都市国家は、単独ではなく、いくつもの国家と民族の興亡の歴史である。

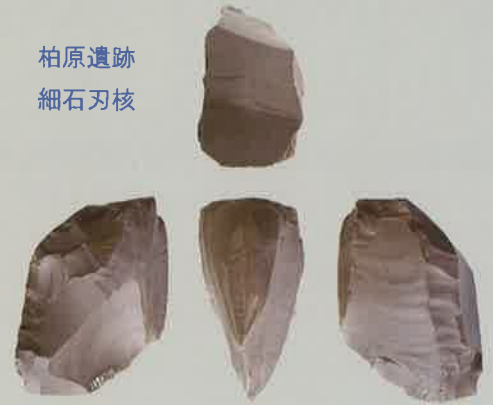
日本では 14000 年前の氷河期の終りに近い時代に、細石刃文化が槍先などの狩猟具の部材として隆盛をむかえるが、縄文時代を迎える前に急速に消滅してしまう。しかし、メソポタミアでは同じ細石刃技法であるが、作られた石刃は鎌の刃として農具の部材として利用されたのである。その時期も初期農耕文明が始まった前 6000 年ころまで使われていた。そのころ、日本は縄文時代早期で飛躍的に遺跡の質や数が増加した。

メソポタミアでは顔料で文様を描いた彩文土器が登場した。

柏原遺跡  
（日本、取手市）  
前 12000 年  
細石刃核



柏原遺跡  
細石刃核



柏原遺跡  
細石刃

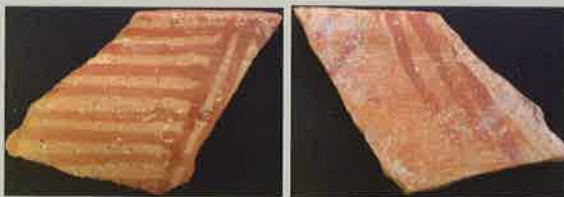


大渡遺跡（日本、取手市） 縄文時代早期 前 6000 年

円形スクレパー  
イラク  
前 6000 年  
07C04



彩文土器  
イラク  
前 6000 年



細石刃核 イラク  
前 6000 年  
13P18



細石刃核 イラク  
前 6000 年  
13P19





彩文土器 イラク 前6000～5000年



西方貝塚（日本、取手市）  
縄文時代中期 前3000年

## II. 土器と土偶

メソポタミア地域での土器の出現は、およそ前7000年と考えられ、原始的農耕と開始時期を同じくしている。

土器製作が1万年以上前から始まるとされる日本の縄文時代と比較すると、かなり遅れた時期である。

研磨による表面調整と酸化鉄などの顔料で文様を描くことを特徴とした彩文土器が作られた。彩文土器には魚や鳥などの具体的な動物を描いたものが多く、波線文や格子文などの幾何学文様ももともとは川や畑を描いたと思われる。こうした、絵画的な思考は、印章文様や楔形文字の発生の基盤となった。

彩文土器は、中国では彩陶とよばれ、仰韶文化（ぎょうしょうぶんか）を代表する土器である。このように彩文土器文化は世界中に分布するが、現状で土器の発生がもっとも古いとされる日本の縄文式土器とはつながりが認められない。このことと、日本の縄文時代に大陸につながる原始農耕が認められないことは、氷河期終末以後の日本島文化の孤立的な状況をよく示しているといえる。

メソポタミアで出土する土偶と日本の縄文式土偶を考えてみよう。メソポタミアの蛇頭土偶は縄文時代中期の中部地方における土偶と顔面が驚くほど似ている。また様式化した地母神像はグロテスクさという点で縄文時代後晩期にあらわれるミミズク土偶と共通する。一方で写実的な神像や土偶を制作することも同じである。それ自体は偶然の一致であることは間違いないが、「機能」という点で共通するものと思われるのである。すなわち、玩具、信仰、宗教それぞれの役割によって作成されたものの違いが表れるのであろう。



西方貝塚（日本、取手市）  
縄文時代中期 前2800年



土偶 イラク 前1800-1600年？  
頭部の表現を省略した人物像



土偶 イラク 前1世紀  
タンバリンを持つ人物像



神明遺跡（日本、取手市）縄文時代晩期  
前1000年 様式化したミミズク土偶



03C08 楔形文字粘土レンガ



07C01 楔形文字粘土レンガ

アッカド語 古バビロニア時代 エシュンナ王銘文



02C01 楔形文字

粘土レンガ

アッカド語 古バビロニア時代 バビロン王銘文



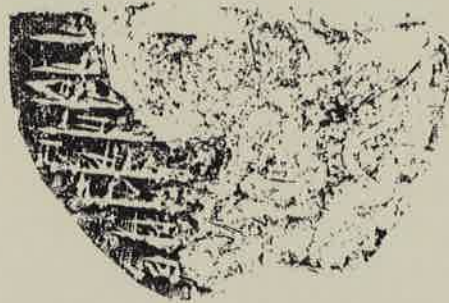
03C07 楔形文字粘土レンガ (右: その拓影)

アッカド語 古バビロニア時代 バビロン王銘文



09P04 楔形文字粘土板 (右: その裏面 上: 拓影)

シュメール語 ウル第3王朝時代 行政文書



13P15 楔形文字粘土板 (右: その裏面)



### Ⅲ. 楔形文字

楔形文字は古代メソポタミア文明を象徴しており文字が書かれた粘土煉瓦や粘土板文書は王名碑文や経済文書、文学として遺され、古代メソポタミアの代表的遺物となっている。

前3200年頃ウルク古拙文字が発明された。最初期の象形文字は、粘土板の上に縦の枠を設け、葦の茎で造った先の尖ったペンを用いて書かれた。文字は単純化された線画で、絵文字に近い。粘土板に筆写するさい線のはじまりが楔形となり、独自の文字となった。これによって字画も曲線はしだいに避けられ、もっぱら直線のみとなった。前2800年頃から、文字は水平の欄に書かれ横書きに変わり、その結果、文字が左に90度回転した。次第に単純化・抽象化され、前2600年初期王朝時代頃に約1000文字のシュメール文字になり、前2000年ウル第3王朝時代に約400文字になった。先を楔形にした尖筆が使われるようになり、粘土板に押し当てて用いられるようになった。書き手は一つの道具を用い、押し当て方に変化を設けて使うようになった。

粘土ではなく石や金属に彫られたものもあったが、それらも楔形文字が使用された。シュメール語、アッカド語、エラム語、ヒッタイト語、ルウィ語、フルリ語、ウラルトゥ語の表記文字としてもちいられ、前1世紀頃まで前後3000年にわたって変化しながら、広く西アジア一帯で使用された。楔形文字の最後の例は、紀元後75年に書かれた天文学上の記録である。

シュメール語は古代メソポタミアで使用された言語である。時代が進むにつれアッカド語に押され、前2006年シュメール人のウル第3王朝が滅亡し、約200年後バビロン第1王朝に覇権が移る頃(前1830)に、口語としては死語となった。しかし、その後も宗教語、学者語として長く存続した。アッカド語は、主にアッシリア人やカルデア人(バビロニア人)やミタンニ人に話されていた共通語であった。シュメール語からの借用語が非常に多いのも特徴の一つである。



スタンプ印章左から「動物文」もしくは「人物文」頭部のみをドリル文で表現、ドリル文の表現であるが「不明」、「こぶ牛」、「魚」、八角形スタンプ「神」もしくは「礼拝者」、右下の印章「不明」、年代はドリル文の2つが前3000～4000年、八角形スタンプは新バビロニア時代で前6世紀、そのほかは時期不明。

#### IV. 印章

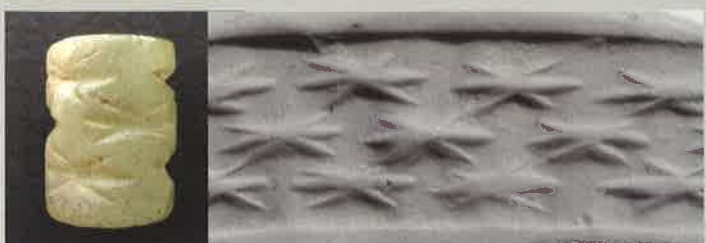
印章はメソポタミア文明で前4000年ころから広く使われた。

印章にはスタンプ印章と円筒印章があり、円筒印章はメソポタミア文明に独特のものである。その形状から、スタンプ印章は文様を単位的に押捺するのに対し、円筒印章は回転させて側面をエンドレスに押捺する。まるで縄文式土器の縄文を押捺する手法と同じである。実際、円筒印章で単純な幾何学文様のものは縄文時代早期土器の押し型文土器と、手法も文様も同じである。

当初はスタンプ印章が、主に封泥として用いられた。封泥は酒壺の口に封をして、その封を泥で固めて開けられないようにするのである。しかし、固めた泥を壊して、再度泥を固めれば、中身だけ盗まれてもわからない。そこで、固める前の柔らかい泥に、目印として自身の所有するスタンプを押したのである。なぜ、酒壺か？ 当時はビールが兵士の楽しみとして配給されたり、酒泥棒は死刑になるなど貴重だったからである。もちろん、酒壺以外に荷造り紐の結び目を泥で固めて荷物の中身を守ることも行われた。簡単だが効果的な方法であった。これは、運搬中の「抜き取り」泥棒に対する防御であり、内容物の保障でもある。つまり、商業交易の発達から発生した。商業交易は安定的な平和と豊かさがなければ成り立たない。これらの印章はその証拠である。

印章はその後、文書にサイン替わりにも使用されるようになった。楔形文字の読み書きは専門の書記がおこなっていたので、契約文書でも法律文書でも、自分自身の意志であることを示すにはサインが必要であったが、自分も、また人々もさっぱり楔形文字は理解できないので、証明するのは印章をもちいるほかなかった。文様は、当初の単純な幾何学文あるいは、魚や星形などの単位文から、大きな画面を利用して光景を描写するようになり、メソポタミア文明を印象づけるものへと発展した。

単純な文様の円筒印章 上段左：「波文」であるが、両端を直線で区画しているのが「川」を意味している。上段右：「魚」である。複数の魚の群れを表現している。下段左：「星」であるが意味は不明。下段右：臼形印章「クモ文」 前3000年



### 1. 「狩獵文」

アケメネス朝 前5-7世紀

2人の人物がそれぞれライオンを逆さにして抑えつけている。人物は房飾りのついた冠をつけており特徴的である。さらに右端には前足をあげて、立ち上がった馬がいる。

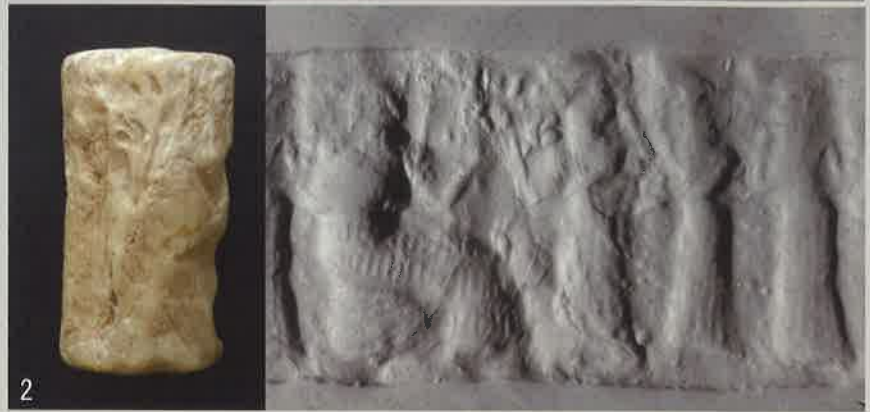


### 2. 「謁見図」

アッカド時代 前2200年ころ

左端に着座する王に3名が謁見している。本来具体的な謁見の状況を描いたはずであるが、磨滅のため、はっきりしない。

貝芯製円筒印章で貝材は、巻貝の芯を削り出して用いたもので加工しやすいため使われたが、柔らかく磨滅しやすい。



### 3. 「礼拝図」

古巴ビロニア時代 前1800年ころ

聖樹であるナツメヤシの木を挟んで2人の人物が礼拝している姿である。2人は頭の形が違うので男性と女性であるかもしれない。右端に見えるのは錫杖と思われる。



### 4. 「饗宴図」

アッカド時代 前2200年ころ

着座する2人にそれぞれ従者がついて、饗宴しているように見える。

貝芯製なので、全体が磨滅して丸みを帯びている。画面もすり減って判読するのは難しい。



### 5. 「騎馬神図」

バビロニア王国時代 前15世紀

騎馬する神像を中心に右側に人物像、神像と人物像の間にトカゲのような動物像があり、さらに騎馬神像の左には、有翼神がみられる。有翼神の下に別な神の上半身がみられる。さらに大きく損なわれた部分に角冠の一部がみえる。



**V. ペルシャ帝国以降（前 539 年～）** 拡大するペルシャ帝国のキロス 2 世によってついにバビロンは陥落し、新バビロニア王朝は滅亡した。以後、アケメネス朝ペルシャやマケドニアのアレクサンダー大王による征服、シリアのセレウコス朝、パルティア王国の支配を受け、西暦 226 年には再びササン朝ペルシャの領土となった。661 年シリアのウマイヤ朝が成立してイスラム時代をむかえることとなった。



無釉短頸壺



無釉片口長頸壺



青釉碗 12-13 世紀



彩画土器鉢 2-7 世紀?



女性像頭部



無釉刻文三耳壺 9-10 世紀



無釉把手付長頸壺



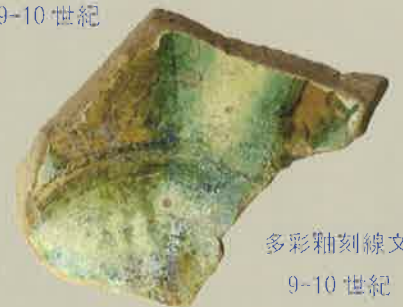
陶製ランプ 1 世紀



ガラス小瓶 9-10 世紀



白地藍黒彩鉢 15 世紀以降



多彩釉刻線文鉢片 9-10 世紀